

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 川里 卓

論 文 題 目

小林秀雄批評の哲学的分析  
——ベルクソン哲学の視点から——

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	宮原 勇
委員	名古屋大学	教授	藤井たぎる
委員	名古屋大学	准教授	布施 哲
委員	名古屋大学	准教授	鈴木 真

## 論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、ベルクソン哲学が、小林秀雄の批評にみられる「美学思想」に対して、どのような影響を及ぼしているかを探究することにある。本論文は、第一部〈ベルクソン美学〉、第二部〈小林のランボーとセザンヌ論における「信じる」行為と「実在」〉、第三部〈小林批評における「無私の精神」と「実在」〉、第四部〈芸術的創造を導くもの〉といった四つの部分から成り立っている。

第一部では、ベルクソンの『笑い』という著作や「ラヴェッソンの生涯と業績」という論文での議論によって、彼の芸術論が再構成されている。そのような美学的思想の根底には、『意識に直接に与えられたものについての試論』や『物質と記憶』における「実在性」に関する理論があり、筆者はそれを手がかりに、小林秀雄の批評理論、ないしは解釈理論を分析している。筆者によれば、小林は、〈それを通じて真の意味での「実在性」が現れる、創造的瞬間における作者の精神の動き〉に注目するという。そのような「実在性」の概念は、ベルクソン哲学の中心的概念であり、それは、「経験」において直接的に与えられるもののことであり、対象の固定化した状態ではなく、「生成」する事物の時間的側面を示しているという。それは、時間的持続そのものから生じ、「主観的」な色合いを持つ対象の知覚像であり、芸術家は、対象のそのような動的な側面の移行の瞬間そのものを捉えようとしているという。

この第一部においては、「ラヴェッソンの生涯と業績」という著作において、ラヴェッソンの説として語られた美学理論が、実はベルクソン自身の美学理論としての意味合いがある点を根拠に、彼の美学理論として検討された。その理論によれば、芸術家とは「自然」の働きによって「有用性」から「離脱」した知覚を与えられ、「神の善意」と自らの意識を一致させることが出来る能力を持つ人々であり、神による創造物であるそれら事物の〈あるがままの姿〉を認識することが出来るならば、そこに同時に神の啓示を読み取ることが出来ると述べている。そこにベルクソンの言う「実在性」のもっている宗教性が読み取れるが、小林秀雄の理論では、そのような宗教的含意はあえて否定され、「人間の手に合う人間の心」によって生み出されたものに基づいて思索や批評を行う姿勢が読み取れるという。

第二部では上記の特徴を小林のランボー論とセザンヌ論をもとに検討している。小林は、ランボーが「純粹視覚の実験」を行ったと述べているが、これはベルクソンの言う「純粹知覚」を言い換えたものであり、これは知覚的経験において実際に「感得」された体験であり、その意味で他の経験との比較を許さない、絶対的に「意識に直接与えられたもの」であると筆者は解釈している。また、セザンヌにとって、自然という「存在」は、意識に直接的に与えられた「存在」であり、そのような「存在」をそのままに捉えるという姿勢を、「信仰告白」という一種の宗教的行為とみなし、芸術家の認識のうちに宗教的な特徴が形を変えて現れていると、筆者は解釈する。

第三部では、「無私」の精神と「実在」の関係を、小林のモーツァルト論とプラトン

## 論文審査の結果の要旨

論を参考に、検討している。本論文を貫く、筆者の主張である〈真なる実在性の直観的把握〉ということが、「無私の精神」との関連で考察され、ベルクソンの「実在」、ないしは「実在性」は、小林批評の文脈においては「感動」を与えるものと言い換えることが出来るという。

第四部では、上記の議論を踏まえ、小林の講演（ベルクソンと柳田論）および彼のゴッホ論を検討し、芸術作品とは芸術家が「ある普遍的なもの」である「実在性」によって「感動」し、生み出したものであると主張するに至っている。筆者によれば、「実在性」との直観的関わりにおいて感動した芸術家が作品を生み出すのだが、批評ということも、それ自体としては「創作活動」であるという。つまり、批評においても、ある種の普遍的な「実在性」が把握されるという。つまり、小林の批評する芸術家が、「無私の精神」とともに対象の「実在」を作品で表現しているならば、作品を「無私の精神」から把握しようとする小林の批評には、芸術家が作品で示した「実在」の姿が現れているはずである。小林批評の特徴とは、作品を分析・解釈してそこから独自の解釈を提示するのではなく、批評する芸術家が作品で示そうとしたものを、その形を壊さずに批評で再度浮かび上がらせる点にある。つまり、小林秀雄の批評では、あくまでも解釈の対象となっているのは、〈作品の中に宿っている「実在」の現れ〉であり、しかも〈それと不可分に結びついた、創造的瞬間における作者の精神の動き〉であると結論づけている。

評価としては、小林秀雄の芸術論に対する従来の様々な批判に対する考察が不足している点がまず指摘される。また、「実在性」を、脱一知性的な単純なる感覚的直観によって捉えるとしても、実際には過去の経験を想起し、未来においてどのような目的が設定されているかによって、自然や芸術作品の意義が変わり、それに応じて「感動する」かしないかが変わる。現在という一瞬に於いてのみ、「実在性」が現れ、把握されると主張するだけでは不十分で、「感動」が起こるメカニズムの分析と議論が必要である。とはいえ、これらの問題点は、ベルクソン哲学に宿る問題であり、その解決はベルクソン哲学自体についての筆者のさらなる研究がなされなければならない。本論文の目的は、あくまでもベルクソン哲学からの、小林秀雄の芸術論への思想的影響関係の解明であったので、本論文は、その意味では、一定の成果を上げることに成功しており、博士論文として十分なものであると見ることができよう。ベルクソンの著作『物質と記憶』等での議論、特に記憶と想起、イマージュ、そして「実在」についての議論を綿密に検討するという作業を基礎にして、ベルクソン哲学からの小林秀雄への思想的影響関係を分析している点は高く評価できる。以上のような意味において、審査委員一同、本論文を博士論文としてふさわしいと判断した。